

令和五年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

中等教育教員養成課程 中等教育プログラム 社会科専攻

注意事項

- 一、解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
- 二、解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

## 〔問〕

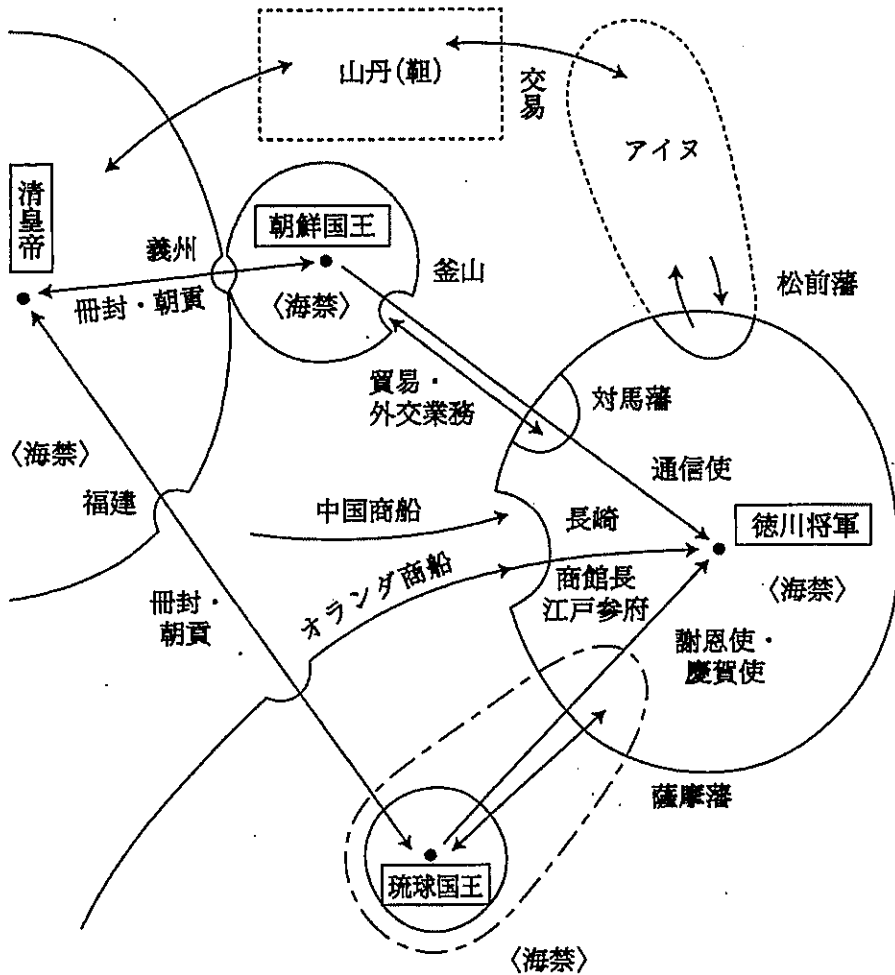
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

### 一 近世日本と東アジアの国際関係―「海禁」と「華夷秩序」を通して見る

配付した資料のなかの「図1 一八世紀頃の東アジアの国際秩序(概念図)」を見てください。これは、日本を中心にする、その対極に中国・清皇帝があつて、朝鮮と琉球を媒介にして両者の間に政治的な関係が続いている。その北側に「山丹さんたん」という地域があります。現在の中国沿海州からロシアのアムール川沿岸部に当たります。「山丹」・「交易」とありますが、これは、この地域を通つて、サハリンから蝦夷地のアイヌを媒介にして、いわゆる「松前口」で繋がっている「交易」(貿易)関係です。これ以外に、長崎を窓口とする中国・オランダとの関係、対馬・朝鮮関係、薩摩・琉球関係があつたわけです。

その特徴の一つは、それぞれの国が海禁政策をとつて、自国民と外国人との自由な関係を管理・統制しながら、外国との関係を国王Ⅱ国家権力が独占するという形で、東アジア全体の国際秩序を確保し、平和を維持しているところにあります。

もう一つの特徴は、中国・朝鮮の場合は、図には表現していませんが、日本の場合で言えば、朝鮮、琉球、中国人・オランダ人、アイヌなどと徳川將軍との儀礼的關係で結ばれているというタテマエになっている、ということとです。その具体的な表象として、朝鮮・琉球からはそれぞれの国王の使節が、長崎からはオランダ商館長が、それぞれに江戸まで通い、徳川將軍に謁見してしかるべき儀礼を行い、中国人は長崎で八朔礼を、アイヌは松前氏や幕府の巡検使に対する「ウイマム」(お目見え)や「オムシャ」(恩謝)という服屬儀礼を行なつて、その秩序に従う形が演出されました。もちろん、その儀礼に参加する人々のアイデンティティとその儀礼とは必ずしも一致しているわけではありませんでしたが、その儀礼を通じて表現される徳川將軍を頂点とする、華夷主義的な秩序を、私は「日本型華夷秩序」と呼んでいます。その基本型、あるいは本家である中国の「華夷秩序」はよく知られていますが、日本・朝鮮も、おそらく琉球も、本家に倣なまつてそれぞれに、国王を中心に、国の内外の人々を華夷主義的に編成してしました。



- 注1) 釜山・義州以外の朝鮮の交易所(会寧・慶源)と、清のロシアとの交易所は本図では省略した。  
 2) 清の海禁は1717年以降。

図1 18世紀頃の東アジアの国際秩序(概念図)

そして、それを維持するために対外関係を厳しく統制する——日本人は自由に海外に渡航することを禁止されるとともに外国人との自由な交わりも禁止され、それを保障する——ために厳しい沿岸警備態勢が敷かれていました。つまり「海禁」と「華夷秩序」という二つの要素によって日本の近世の国際関係は統制・運営されていたわけです。それは基本的には中国がとっていた体制——明がとつていて後に清がとることになる体制——、あるいはその同時代に朝鮮がとつていた体制と、共通した面が多いのです。もちろん、国による違いはあります。特に「華夷秩序」については、中国や朝鮮と比べると、例えば天皇の存在など著しく日本的な特徴があるため、「日本型華夷秩序」と呼んだらどうかと、私は考えているわけです。

こうして東アジア諸国は、それぞれに「海禁」と「華夷秩序」という要素（あるいは原則）によって国際関係を構築しており、そのことによって、一七世紀後半から一九世紀前半（アヘン戦争）くらいまで、ほぼ二世紀にわたって平和が続くのです。これだけ長い間平和が続いたというのは、おそらく、地球史上にあまりなかったことであり、おそらく、今後も、そう容易には実現しないのではないのでしょうか。その点では、この体制とそれによつてもたらされた平和と文化の成熟は、現代日本の平和憲法とともに、いわゆる世界歴史遺産に値するものではないか、と私は考える次第です。

## 二 近世日本と東アジア国際市場—貿易に見る日本と東アジア

次に、その政治的関係のもとで、どのような経済的関係があったかを示しているのが、「図2 一七世紀後半—一九世紀半ばの東アジア貿易と日本」です。

この図では、右側に日本市場が、その反対側に中国市場があります。例えば長崎での中国貿易というのは、中国は一七世紀前半に明清交代があり、一七世紀後半に清の覇権が確立して以後、中国大陆から直接中国船が長崎にどつとやってくるようになります。

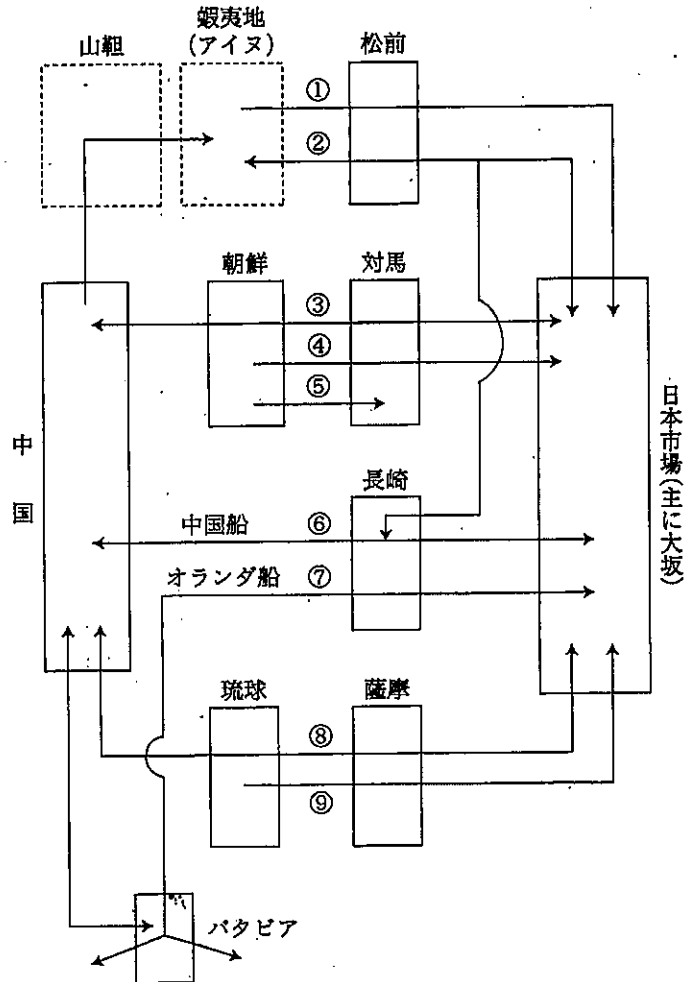


図2 17世紀後半～19世紀半ばの東アジア貿易と日本

注1) 交易品(概略)

- ① →鷹・金(～17世紀半ば), 木材(17世紀末)
  - ② 米・日用品など↔海産物・毛皮など
  - ③ 生糸・絹織物↔銀(～18世紀初), 菜種・毛皮など↔銅(18世紀半ば～)
  - ④ 人參(～18世紀半ば), 木綿→
  - ⑤ 米→
  - ⑥ 生糸・絹織物↔銀・銅(～17世紀末), 絹織物・菜種ほか↔銅・海産物(18世紀～)
  - ⑦ 生糸・絹織物↔銀(～17世紀末), 絹織物↔銅(17世紀末～)
  - ⑧ 生糸・絹織物↔銀(～18世紀半ば), 菜種・絹織物ほか↔銅・海産物(18世紀半ば～)
  - ⑨ 砂糖→
- 2) 蝦夷地の重要性は, 18世紀に入り, 海産物が長崎の中国貿易の主要な輸出入品となり, またそのころ農業における金肥(魚肥)使用が盛んになって, とくに増大。
- 3) 琉球は, このほかに1万石余の貢米を上納(薩摩藩へ)。

長崎には、よく知られているようにオランダ船もやって来ます。中国船も、口船から奥船まであり、奥船はオランダ東インド会社の拠点であるバタビアまで行きますから、バタビアから長崎に来ることもあるわけです。このように、日本（長崎）と中国・東南アジアを中国船とオランダ船が繋いでいたわけです。

また、この図で朝鮮との貿易を見ていただくと、③④⑤という三つの貿易ルートがあるのが解りますね。③は、主に、生糸や絹織物を輸入して銀を輸出するという関係になっています。実は、生糸や絹織物は中国産です。金・銀はもちろん日本産ですが、これは対馬・朝鮮を経由して日本と中国が経済的に繋がっていることを示しています。琉球との貿易関係についても、ほぼ同様のことが言えます。

この図から、大きく三つのことが解ります。一つは、「四つの口」を通る貿易ルートの両端に、日本と中国の市場がある、ということです。つまり、日本市場は中国市場と長崎だけでなく琉球・朝鮮・松前を通じて繋がっていたということです。もう一つは、これらの「四つの口」の貿易によって、長崎の町や薩摩・対馬・松前の三藩が生計を立てていたということです。

三つ目は、輸出入ともに、貿易品が、時期によって変化しているということです（図2・注1参照）。その変化の一つは、一八世紀の初め頃にあります。その頃、日本の銀生産が落ちこんでいく一方、日本の経済発展によって経済規模が膨張して、国内に流通させる貨幣材料でもある銀の輸出が難しくなってきました。そのために、銀の輸出を制限し、さらに禁止したために、それまで輸入されていた中国産の生糸や朝鮮産の人参などが輸入されなくなります。それぞれが貿易上の対価（たいか同等の価値を持つ商品）とされてきたからです。こうして、貿易品にもいろいろな変化が起きてきます。

その変化は、周辺諸国で構成される国際市場と日本の国内市場は、近代以後ほど直接的ではないにしても、有機的に繋がっていることを示しており、近世日本の経済が、決して自給自足ではなかったことが、これで解ります。自給自足経済アウタルキというのが「鎖国」の特徴とされていたのですが、この点でも近世日本は「鎖国」とは言えないわけです。

次に、「表 人口・耕地・実収石高の推移（推定）」を見てください。江戸時代というのは、進歩のない閉鎖的で停滞的な社会であったという風に皆さんも教えられてこられたと思いますが、最近の研究によれば、決してそうではありません。もちろん一九五

表 人口・耕地・実収石高の推移(推定)

| 時期   | 人口・N<br>(万人) | 耕地・R<br>(千町) | 実収石高・Y<br>(千石) | Y/N<br>(石/人) | Y/R<br>(石/反) |
|------|--------------|--------------|----------------|--------------|--------------|
| 1600 | 1,200        | 2,065        | 19,731         | 1.644        | 0.955        |
| 1650 | 1,718        | 2,354        | 23,133         | 1.346        | 0.983        |
| 1700 | 2,769        | 2,841        | 30,630         | 1.106        | 1.078        |
| 1750 | 3,110        | 2,991        | 34,140         | 1.098        | 1.141        |
| 1800 | 3,065        | 3,032        | 37,650         | 1.228        | 1.242        |
| 1850 | 3,228        | 3,170        | 41,160         | 1.275        | 1.298        |

注) 本表は、石井寛治『日本経済史 第2版』(東京大学出版会、1991年)によるが、表そのものは、速水融・宮本又郎「概説17～18世紀」(『日本経済史』1、岩波書店、1988年)44頁所収の表に基づいて作成されたものである。

○年代から七○年代にかけての高度経済成長や明治維新後の成長ほどではありませんが、江戸時代を通じて経済は徐々に発展していることが、この表からも解ります。人口は、関ヶ原の戦いがあつた一六〇〇年に一二〇〇万人だったのが、二五〇年後の一八五〇年には三二二八万人に増えています(二・六九倍)。一六〇〇年・一六五〇年については、統計的な数字は残っておりませんが、残っているさまざまな資料に統計学的な処理を施して割り出したものです。一七〇〇年以降は幕府の調査資料などがありますので、こういう細かい数字が出せるわけです。

いずれにせよこの表から明らかなように、近世の初めと幕末とでは人口は三倍近く増え、耕地も拡大され、実収石高は倍以上になっています。近世というのは、社会がゆつくりとではありますが、成長していましたが、そういう時代だったのですね。もちろん近代以後のような速度ではありませんが、経済的にも成長した時代だったのです。先にも言ったように、このためやがて銀が不足してくる。銀は当時の貨幣の主要な材料ですから、経済規模が拡大すると貨幣の流通も増え、銀の需要も増えていきます。ところが、銀というのは主要な輸出品でもありませんから、そこで銀の輸出を禁止せざるをえないことになったのです。すると生糸が入ってこなくなる。朝鮮貿易の場合で

すと、薬用として非常に貴重な朝鮮人蔘が輸入されなくなりました。しかし、それがそのまま終わってしまうのではなく——ここが日本人の凄いところなんです——いろいろと努力して、中国から輸入していたものに代わる上質の生糸を国産できるようになり、さらには栽培の難しい朝鮮人蔘まで国産できるようになるのです。

ついでに砂糖についてお話ししておきます。砂糖も江戸時代の初期には主要な輸入品の一つでした。砂糖には、白糖(白砂糖)と黒糖(黒砂糖)があります。白糖は、主に、輸入品でした。しかし、黒糖は一七世紀の後半から琉球で、一八世紀にはいつてか

らは、奄美諸島で生産されるようになります。琉球も中国貿易以外で何とか生きていく方法を探るなかで、中国から黒糖の製法を導入します。そして、黒糖が大坂で非常に高値で売れるということが分かって、生産に力をいれます。しかし薩摩藩は、砂糖が有利な商品であることに目をつけて、その生産を琉球だけにとどめずに、琉球から割きとって自分の領分とした奄美諸島（琉球文化圏の奄美諸島が、現在でも鹿児島県に属しているのはこのため）でも生産を開始します。そして、奄美の黒糖が大坂で値崩れするのを防ぐために、琉球の生産を抑え、その一方で、奄美を黒糖生産の中心に据え、奄美諸島を黒糖生産のためのプランテーションにしていくのです。江戸時代に日本で消費された黒砂糖のほとんどは琉球と奄美、特に奄美で生産されたもので、それが薩摩藩の経済を支えたのです。薩摩藩が雄藩として明治維新の原動力になったことはよく知られていますが、それを経済的に支えた基盤の一つは琉球、特に奄美の砂糖であったということを忘れることはできません。

砂糖のことで、もう一つ、付け加えることがあります。それは、白糖も、日本で独自の製法を開発して、国産できるようになったことです。一九世紀にはいると、それがオランダ船などで輸入される白糖を値崩れさせるほどになっています。上品な甘みで知られ、今でも生産されている「和三盆」わさんぼんがそれで、これが大量に市場に出回るようになったために、輸入白糖のみでなく、黒糖まで値崩れし、そのために薩摩藩は、藩財政を支えるために、本格的に密貿易に手を出すことになった、とされています。

ここで話したかったのは、江戸時代というのは緩やかに発展し日本人の生活も徐々に向上していった、それが明治以後の日本の近代化を準備したのですが、その傍らで、その発展を支えながら、その下敷きとなって苦しい生活を強いられた人たちがいたということ。それがまず、琉球（沖縄）、奄美の人たちでした。

アイヌの人たちについても同様のことが言えます。例えば昆布は、江戸時代は中国向けの主要な輸出品であり、かつ庶民の食材としても重要なものでした。庶民の生活が向上すると、国内でも昆布の需要が高まります。よく知られているように、昆布は北海道以北しか採れません。昆布の需要が高まると、その漁場で働くアイヌたちへの収奪が一層強化されるといふ関係がありました。

日本人の生活レベルの上昇は、当時の蝦夷地での生産形態を通じてアイヌへの搾取に繋がった。このことを忘れてはいけません。思います。



「鎖国」だった、あるいは自給自足の経済だったと言い切ってしまうことは、このような境遇に置かれた人たちの存在を切り捨てること、視野から落としてしまうことに繋がるのです。そういう意味で私は、「鎖国」という言葉は絶対に容認できないと思っているわけです。実は、<sup>②</sup>現在の私たちの生活も、似たような形で世界の人々の生活とも繋がっている、ということをお忘れなくようにしたいと考える次第です。

出典 荒野泰典『「鎖国」を見直す』第Ⅰ部「4 東アジアのなかで息づく近世日本——「鎖国」論から「国際関係」論へ」

岩波現代文庫／学術 412 岩波書店 二〇一九年

(注) 問題作成の都合上、表記の一部を改めたところがある。

問一 下線部①のように、筆者は「近世日本は「鎖国」ではなかった」と主張しています。筆者がそう主張する根拠を要約して、記述しなさい。

問二 あなたが、下線部②「現在の私たちの生活も、似たような形で世界の人々の生活とも繋がっている」と考える事柄について、具体例を挙げつつ、一〇〇〇字以内で論述しなさい。